問題

二〇二五年度　入学試験問題
（三学部共通）一般選抜　Ⅰ期2日目

国語

時間　五〇分

注意事項

一．試験開始の「合図」があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
二．「受験票」は、机の上の受験番号票と並べて置いてください。
三．試験開始・試験終了は、試験監督者の「始め」、「止め」の合図に従ってください。
四．この問題冊子のページおよび解答科目は、左の表のとおりです。

科目	問題ページ	備考
国語	1～12	

五．解答用紙が別にあります。
六．「始め」の合図後直ちに、解答用紙に受験番号のみを記入してください。
七．試験室に入室してから試験終了までは退室を認めません。
八．試験中に質問のある場合、または気分が悪くなった場合等には、手を挙げて監督者の指示に従ってください。
九．「止め」の合図後直ちに、筆記を止めてください。
十．退室は監督者の指示に従ってください。「受験票」は持ち帰ってください。

国語

〔Ⅰ〕 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

２０２１年、ネットの一部で数年前から使われていた「親ガチャ」という、見るからに不穏な響きをたたえたワードがテレビで紹介され、あっという間に実社会に広まった。その年の流行語を選出することで世間的に知られている「ユーキャン新語・流行語大賞」にもノミネートされた。

「親ガチャ」とは、自分の両親や生まれた家庭環境は自分の意思では選べず、選択の余地のない両親や家庭環境による人生への重大な影響が、いうなれば完全な運任せであることを、景品のランダム排出システムの別称「ガチャ」になぞらえたスラングである。

このワードの賛否や是非をめぐり、世間では大きな論争が巻き起こった。ネットやテレビだけでなく、一時期にはあらゆるメディアがこのトピックを取り上げた。「親ガチャ」の是非や、この言葉がブームになった社会的背景について、各界の知識人や文化人たちが激しく議論を戦わせた。

「（　1　）は、自分の置かれた不満足な現状を他人や外部要因のせいにしようとしている」という批判的意見がある一方で「（　2　）は、いま自分が恵まれた立場にいることに無自覚で傲慢な人間だ」といった反論も出された。

「親ガチャ」流行の背景について、この語がネット上で流行するきっかけをつくった人物とされる社会学者の土井隆義（たかよし）は、若者たちが自分たちの置かれた（相対的）貧困状態に対してある種の「諦観」を持ったからであると考察している。

この論考はたしかに①スジがとおっている。ひと昔前の若者にならばぴたりと当てはまっただろう。（　3　）、現代社会の若者たちは必ずしも自分たちの社会経済状況について諦めているわけではない。かれらは時代を相対視してなんらかの感情を抱く以前に、格差と貧困が深刻化する現在の経済状況を、特別変わったところのない、いわば(a)ニュートラルな状態であると考えて今日まで生きてきたからだ。

素晴らしく輝かしかった好景気の時代から「失われた〇〇年」というどん底の不況へのジェットコースター的な滑落を肌感覚で知る（90年代から２０００年代に若年期を生きた）かつての時代の若者たちからすれば、ついこの間まであったはずの栄光の日々を懐かしみながら、現状の社会の体たらくに意気消沈し、ついには「諦念」を抱いて生きる――といった流れはたしかにありえる。評論家の古市憲寿（のりとし）が２０１１年に書いたベストセラー『絶望の国の幸福な若

者たち』は、２０００年代の若者たちのまさに(b)そのような機序[注一]を言語化したものだといえよう。

だが、現在の若者たちはかつての輝かしい時代には物心がついておらず、その当時の記憶がないどころか、（　4　）生まれて（　5　）いないこと（　6　）ある。かつてこの国に存在していて、自分たちには与えられることなく消えてしまった栄光の日々をずっと期待して、ついに根負けして絶望してしまったわけではない。かれらにとってこの国の社会とは物心ついた瞬間からすでにそういうものだったから、昔と比べて社会経済状況が劣悪であることに不満を持ったり、不当に機会を奪われているなどと憤ったりすることもない。

ひと回りふた回り上の先輩（いわゆるリーマン・ショック世代[注二]や就職氷河期世代[注三]）に尋ねても「いや、昔から景気はずっとわるかったよ」といわれる。先輩に(c)異口同音に答えられ、なるほどそういうものなのかと納得する。現在の若者たちは、いまの社会に対して期待するでもがっかりするでもなく、ただそのようなものとして、ありのままに受け入れているだけだ。

中高年層の感覚では80年代後半から90年代初頭はごく最近であるように思えるかもしれないが、現代社会の若者世代は90年代後半から２０００年代の生まれなどである。かれらは日本が未曽有の好景気に沸いていた時代など知りようもない。(d)歴史の教科書で学ぶ遠い世界の物語なのだ。

年長世代の目から怒りも諦めもない若者たちの姿を見ると「若者たちは現状に満足している（なんら不満を持っていない）」ように見えてしまう。だがそうではない。過去と現在を比較検討するには、失われた〇〇年があまりに長かったのだ。若者たちの肌感覚では、過去も現在も同じ姿をしている。

むかしの若者といまの若者が決定的に違うのは、「日本にかつてあった栄光の時代を肌感覚で知っているかどうか」だけではない。

いまの若者には、人間社会の(e)「ネタバレ」があまりにも多く供給されてしまった。

行動遺伝学や発達心理学といった、人間の究極的な欲求や認知的行動を研究する新しい学問が目覚ましい進歩を遂げた。結果として、遺伝子や認知的特性がその人の能力や人格、ひいては人生に与える影響が、私たちが想像していたよりもずっと大きいことが「②暴露」された。心理学者の安藤寿康（じゅこう）は、これまで後天的な努力によって個人的に培われると世間的に信じられてきた数学や音楽などの能力が、実際にはきわめて大きな遺伝的影響を受けていることを突き止

国語

め、それを世に発表して大きな衝撃を与えた。

安藤の研究は、体格やＩＱはもちろん、性格特性から才能から発達障害や反社会性まで、人間にまつわるありとあらゆる側面が、遺伝という本人の努力ではどうすることもできない「初期設定」によって、とても無視できないほど大きな影響を受けていることを示してしまった。自分の人生に大きな影響を与えることが必至の重大なパラメーターが、遺伝という要因によって大きく左右されている事実は、さながら自分の運命が自分自身の力ではなく、なにか③得体のしれない大きな力によって(f)すでに手が加えられているかのような感覚を持つには十分だ。

また遺伝的・発達的要因だけでなく環境要因にも言葉を失うほどの「ネタバレ」が次々に提供されるようになっていった。たとえば東京大学の学部生の親の世帯所得は6割以上が９５０万円以上であり、なかでも１５５０万円以上の所得を持つ、社会全体からすればきわめて例外的な高所得層が1割以上を占めるという驚くべき結果になっている。文字どおり、社会経済的エリートは（　７　）。

「遺伝」と「代々にわたって再生産され④ケイショウされてきた豊かな社会的・経済的環境」は、個人的な努力や情熱とは比較にならないほど、その人の社会的地位や経済的成功の可能性を大きく支配する。この身も⑤蓋もない事実が、確度の高いエビデンスとともに、それこそ暴力的ともいえるくらいはっきりと白日の下にさらされている状況が、２０２０年代という時代の前提となっている。

若者たちにとっては「努力すれば報われる」という、ひと昔前までであれば多くの人から素朴に信じられ⑥コウテイされてきたような美しい物語を、真っ向から否定し叩(たた)き壊す「不都合な真実(ネタバレ)」があまりにも数多く提供されすぎてしまったのである。

（御田寺圭『ただしさに殺されないために　声なき者への社会論』より。ただし、一部改変してある。）

注一　機序――しくみ、メカニズム。

注二　リーマン・ショック――アメリカ合衆国の投資銀行リーマン・ブラザーズ・ホールディングスが２００８年に経営破綻し、そこから連鎖的に世界金融危機が発生したできごと。

注三　就職氷河期――バブル崩壊後の１９９３年から２００５年ごろの、日本における新卒に対する有効求人倍率の低水準時期。一転して急落した就職難の厳しさが氷河期にたとえられた。

問一　傍線①・④・⑥のカタカナを漢字に直しなさい。

問二　傍線②・③・⑤の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問三　空欄（　1　）・（　2　）に入る語の組み合わせとして最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　（1）『親ガチャ』という言葉に強い拒絶感を持たない人
　　（2）『親ガチャ』という言葉を嫌がることのない人
イ　（1）『親ガチャ』という言葉に嫌悪感を持たない人
　　（2）『親ガチャ』という言葉を不愉快に思わない人
ウ　（1）『親ガチャ』という言葉を強く否定する人
　　（2）『親ガチャ』という言葉を決して軽視しない人
エ　（1）『親ガチャ』という言葉に拒否感を持たない人
　　（2）『親ガチャ』という言葉を頭ごなしに否定する人
オ　（1）『親ガチャ』という言葉をあまり使っていない人
　　（2）『親ガチャ』という言葉に強い抵抗感を示さない人

問四　空欄（　3　）に最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　それに加えて　　**イ**　たとえて言えば　　**ウ**　しかしながら
エ　つまるところ　　**オ**　そのいっぽうで

問五　傍線(a)「ニュートラルな状態」とはどういう状態か、最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　格差や貧困があってもしかたのないことだと諦めている状態。
イ　格差と貧困があってもそれをごくふつうに受け入れている状態。
ウ　自分たちの生活の原点は貧困の中にあると思い込んでいる状態。
エ　格差も貧困も騒ぎ立てるほどのものではないと悟っている状態。
オ　自分たちの時代は就職氷河期ほどひどいものではないと慰めている状態。

国語

問六　傍線(b)「そのような機序」はどのような流れを指しているか、最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　素晴らしく輝かしかった時代からどん底へのジェットコースター的な滑落を恨みながらも、希望を捨てられないでいるという流れ。

イ　好景気の時代からどん底の不況への滑落を肌感覚で知った、90年代から２０００年代に若年期を生きたかつての若者たちをいとおしむようになるという流れ。

ウ　自分たちは貧困状態に置かれ、確かに絶望感を味わったのだが、決して希望を捨てないで生活するという流れ。

エ　かつてこの国に存在していて、自分たちが享受することなく消えてしまった栄光の日々をずっと期待し、ついに根負けしてしまうという流れ。

オ　栄光の日々を懐かしみながら、現在の社会経済状況に意気消沈し、ついには諦めの気持ちを持つようになるという流れ。

問七　空欄（　４　）・（　５　）・（　６　）に入る語の組み合わせとして最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　（４）ついぞ　（５）だに　（６）まで
イ　（４）まだまだ　（５）も　（６）だって
ウ　（４）わざわざ　（５）しか　（６）こそ
エ　（４）そもそも　（５）すら　（６）さえ
オ　（４）いまだに　（５）なんか　（６）が

問八　傍線(c)「異口同音」の意味は次のうちどれか、最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　多くの人がみな口をそろえて、同じことを言うこと
イ　多くの人が集まって、みな勝手なことを言い合うこと
ウ　みなと意見の異なる人が、自分の主張を曲げないこと
エ　感情的な言葉をたくさん並べ、納得させること
オ　仲間で口裏を合わせて、意見を強く主張すること

問九 傍線(d)「歴史の教科書で学ぶ遠い世界の物語」とはどういうことか、最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 日本から遠いある国の出来事で、歴史の教科書にしか出てこない物語。
イ 自分の生活に関わりのない夢のような物語だとして学ぶ世界史。
ウ 世界史の教科書に載っている歴史的な出来事とつながる複雑な話。
エ 自分たちはまったく経験したことがなく、現実味の感じられない過去の出来事。
オ 世界のどこかの人が大昔に作ったおとぎ話のようなくだらない物語。

問十 傍線(e)「『ネタバレ』」の一例として筆者が取り上げていることをまとめた次の文の空欄に入る言葉を文章中から**二十二字**で探し、記入しなさい。なお、句読点・記号も字数に数える。

これまで後天的な努力によって獲得されると考えられていたものが、（　　）ということが学者の研究によって公表されてしまった。

問十一 傍線(f)「すでに」という語によってどのようなことが強調されているか、最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 自分の人生は自分の力でどうにかできるものではなく、誰かに頼るしかないこと。
イ 自分の運命は決定されてしまっていて、今さらいかんともしがたくなっていること。
ウ 得体のしれない大きな力には、いくら対抗してもかなわぬと悲嘆に暮れること。
エ 遺伝という「初期設定」は、運命そのものであり、それが残念至極であること。
オ 人生に大きな影響を与えることが必至の重大なパラメーターが遺伝であること。

問十二 空欄（　7　）に最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 高学歴のエリートから生まれるのである
イ 例外なくエリートになるのである
ウ 東京大学でもエリートなのである
エ エリート生産の不確定要因なのである
オ エリートを再生産するのである

国語

〔Ⅱ〕 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

私がなりわいとしている文化人類学は、「フィールド」と呼ばれる調査地に出かけてゆき、そこに長期間住みこんで、人びとの暮らしについて調査をするという学問だ。人びとの暮らしや考えていることを理解するためには、その土地の言葉ができなくてはならない。少なからぬ人類学者は、日本であらかじめ調査地の言語を勉強してから調査に出かけるのではなく、(a)とりあえずフィールドに入り、そこで暮らしながら少しずつ言葉を学んでいく。私自身もそんな風にして、これまでタンザニアやガーナ、南インドで調査を行ってきた。

大学院の修士課程に①ザイセキしていた頃、同じく人類学者の卵としてモンゴル研究をしていた友人と、「(b)日本で思わず現地語が出てきちゃうケース」について語りあったことがあった。モンゴル語では、「ハッ」と息を吸い込むあいづちがあるらしく、彼女は日本語で会話をしている最中にも、「思わず『ハッ』ってやっちゃうことがある」という。私も同じく、舌で口蓋を「タッ」と軽く打つあいづちがひょっこり出てしまうことがあった。驚いたときの「エイ！」といった間投詞も、現地語が「思わず出ちゃう」ケースに含まれる。日本語で話しているにもかかわらず、なぜそんな表現が飛びだしてしまうのか。それは、それらが言語というよりも声、もっといえば身ぶりに近い表現であって、だからこそフィールドに滞在しているうちに、人類学者の身体に深く染みこんで離れないものになるからではないだろうか。ある土地に暮らしながら言葉を学んでいくとき、言葉は常に声であり、身ぶりであり、やりとりの中にある。それをまるごと学んでいくことは、人びとの声音（こわね）や身ぶり、やりとりの作法を学ぶことだ。そのとき、「学ぶ」ことはまさに「まねる」ことであり、身体的な行為にほかならない。だから長期の調査から戻って間もなく、頭では日本にいるとわかっていても、身体はまだフィールドの感覚のままであるとき、とっさに出てくる間投詞が現地語になってしまうのだろう。

（　1　）、現在中学三年生の長女は目下、(c)受験英語と格闘中である。文法を覚え、単語を覚え、英文和訳し、和文英訳し……と奮闘している娘をみていると、「ああ、こういうの私もやったな」と懐かしく思う一方で、自分が中学生だった頃と学習方法がほとんど変わっていないことに驚きもする。最近でこそ、読み書きだけではなく「聴く・話す」能力も重要云々（うんぬん）といわれているが、それでも中学校で学ぶ英語は基本的に、頭で覚えて問題を解くという机上の教科であることには変わりがないらしい。それはさっき書いたような、ある言語を話している人たちと暮らし、必死にやりとりしながら、からだ全体を使ってその言葉を「まねる・学ぶ」方法とは対照的であるようにみえる。とにかくやりとりする、という②無謀で野蛮な後者の方法では、「私が理解すること」よりも「お互いが了解すること」、「頭でわかること」よりも「腑（ふ）に落ちること」の方が重要になる。そんなやりとりには、その場の状況、相手との関係性、言葉のリ

ズムや話しだすタイミングなどのすべてが関わっている。それは言語の「学習」というよりも、相手との間に（　2　）なかかわりをつくりだすことだ。

ガーナの村に住んでいたころ、よく耳にするにもかかわらず、意味のわからない単語があった。ある日、近所の子どもと一緒に幹線道路の端を歩いていたら、ミニバスが私たちの横スレスレを猛スピードで追い抜かしていき、（　3　）ことがあった。そのとき、その子がすかさずバスに向かって③コブシを振り上げ「クワッシア！」と叫んだのを見て、私は悟った。クワッシア＝「バカ」だったのか。

そんな風に、ある状況の中で発せられる言葉を、声音や身ぶりや表情といっしょに全身でまねて／学んでいるうちに、だんだんと自分の思考や独り言や夢の一部が現地語のそれになってくる。それは、単に④語彙が増えた、文法がわかってきた、という以上に、自分の身体感覚、ひいては身のまわりの世界や他者との関わり方が少しずつ変化していることを感じる段階だ。ある言語が「自分のものになっていく」という感覚をもつとき、同時に私はその言語の語彙や、リズムや、やりとりが生みだしつづける独特な世界の網の目の中に少しずつ取りこまれている。

雪の多い土地で、雪を表現する語彙が豊富だというのは有名な話だけれど、私はガーナで暮らすうちに、さまざまな儀礼や霊的存在に関する語彙の豊かさを知ることになった。私自身の研究テーマがそうした土着の宗教実践だということにもよるが、英語や日本語には簡単に翻訳できない、豊かで多義的な語彙を学び、同時に儀礼や⑤呪術の実践にふれるうちに、私はいつのまにか呪術師や精霊たちの住む世界を、現実そのものとして受けとめている自分に気づいた。ガーナの村で、「オボソン」と呼ばれる精霊について語りあうことは、外側からそうした「お話」の世界を観察することではなくて、精霊や呪術師が躍動している現実世界に全身で参入し、その世界を生きることでもある。それは、英文和訳のように、異文化の言葉や概念が自文化の言葉や概念にスムーズに置き換えられることを前提とした言語の学習とは異なり、自分の身体感覚や世界認識そのものが揺らぎ、不安定化していくような経験だ。だから、(d)人類学のフィールドワークは楽しくもあり、ときに非常に疲れる体験でもある。

人類学者のタラル・アサドは、「文化の翻訳」をテーマとした論文の中で次のように書いている。人類学者が調査地の言語を母国語に翻訳しようとするとき、彼／彼女は一組の文と文を対応させるような機械的な翻訳を行うのではない。あるいはまた、現地の人たちの語りが常に論理的にみえるように、都合のよい解釈を施しているのでもない。むしろそれは、フィールドでの生活を通して異なる言語や思考のあり方を学び、それを自国の人びとに伝えようと試みる中で、(e)人類学者自身の言語の新たな可能性が立ち現れてくるような翻訳なのである、と。

言葉は何よりもまず声であり、リズムであり、やりとりであるのだから、それを学ぶには全

国語

身で他者や世界と関わり、とっくみあわなくてはならない。その過程で、私は言語を自分のものにしていくと同時に、その語彙や身ぶり、リズムが織りなす世界に取りこまれていく。私の身体はそのとき、母国語と現地語を⑥バイカイするものになる。現地語の世界に没入し、そこに生きる「私」に変身しながら、母国語でフィールドノートをつけるとき、そこには常に「没入（変身すること）」と「再帰（我に帰ること）」の往復運動がある。そんな風に没入と再帰をくりかえしていくうちに、自分自身がしだいに根底から変容してゆき、(f)ついにはどちらが「我」で、どちらが「変身」なのかもわからなくなってくる。日本に戻って、日本人の学生としてふるまっているつもりでも、思わず口から飛びだす「ハッ」というあいづちとともに、長く暮らしたフィールドでの「私」がふいに蘇（よみがえ）ってくることがあるのだ。からだ全体を使って、身ぶりやリズム、やりとりとしての言葉を身につけることはだから、常に変わらない「この私」が異文化の言語を知り、理解し、習得する、といった(g)一方的なプロセスではない。そうではなくて、それは変身の経験、別な世界に生きる「私」の生成であると同時に、その世界によって「私」が少しずつ知られ、のっとられていくような経験でもあるのだろう。

（河出書房新社編『わたしの外国語漂流記　未知なる言葉と格闘した25人の物語』所収
石井美保「あいづちと変身」より。ただし、一部改変してある。）

問一　傍線①・③・⑥のカタカナを漢字に直しなさい。

問二　傍線②・④・⑤の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問三　傍線(a)「とりあえずフィールドに入り、そこで暮らしながら少しずつ言葉を学んでいく」のはなぜか、最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　身ぶりに近い表現を身につけることが目的だから。
イ　そのほうが短期間で現地語を流暢（りゅうちょう）に話せるようになるから。
ウ　文化人類学は言語を身につける学問とは異なるから。
エ　からだ全体をつかって言葉をまるごと学びたいから。
オ　長期の調査をすれば現地語はだれでも話せるようになるから。

問四　傍線(b)「日本で思わず現地語が出てきちゃう」理由を、「～から。」に続く形で文章中から**三十六字**で探し、**はじめと終わりの五字**を記入しなさい。なお、句読点・記号も字数に数える。

問五　空欄（　1　）に最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　ところが　**イ**　それから　**ウ**　たとえば　**エ**　したがって　**オ**　ところで

問六　傍線(c)「受験英語」と筆者が書いたのはなぜか、最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　自分の頃よりも「聴く・話す」が重要視されているから。

イ　もっぱら受験にしか役立たない机上の英語学習であるから。

ウ　昔と同じ方法で英語を身につけてもちっとも身につかないから。

エ　文法、単語、和訳、英訳といった学習では英語を話せるようにならないから。

オ　英語を日本語にスムーズに置き換えられるはずがないから。

問七　空欄（　2　）に最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　野生的・感動的　**イ**　集団的・個別的　**ウ**　身体的・感覚的

エ　学習的・発展的　**オ**　共同的・創造的

問八　空欄（　3　）に最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　肝を冷やした　**イ**　肝を試した　**ウ**　肝を据えた　**エ**　肝をなめた

オ　肝を潰した

（次のページに続きます）

問九 傍線(d)「人類学のフィールドワークは楽しくもあり、ときに非常に疲れる体験でもある」とあるが、それはなぜか、最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 英語や日本語には簡単に翻訳できない現地語を身につけ、現実的ではない世界を味わうから。

イ 英文和訳や和文英訳のような机上の学習とはまったく異なる言語習得の方法を体験するから。

ウ 精霊や呪術師が躍動している現実世界に全身で飛び込むと、霊的存在によって心身に変調を来すから。

エ 外側から観察するのではなく現地の文化の内側に入り込んでみると、グローバルな世界認識ができるから。

オ 自分の全身で異文化を学び受けとめることによって、これまでの価値観では対応しきれなくなるから。

問十 傍線(e)「人類学者自身の言語の新たな可能性が立ち現れてくるような翻訳」とはどういうものか、最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 現地語と母国語をうまく対応させるような翻訳。

イ できるだけ現地語を生かしながらわかりやすく述べる翻訳。

ウ フィールドでの体験を散りばめて現地理解を深めるような翻訳。

エ 翻訳者が全身で現地語を自分のものにしていく結果生まれる翻訳。

オ 現地の語りに翻訳者がわかりやすい解釈を施すような翻訳。

（次のページに続きます）

問十一　傍線(f)「ついにはどちらが『我』で、どちらが『変身』なのかもわからなくなってくる」とはどういうことか、最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　母国語でフィールドノートをつけているはずが、知らぬ間に現地語で書いてしまっているほど混乱が深まっているということ。

イ　調査地の言語の語彙やリズムが織りなす世界に取り込まれてしまった結果、自分自身の母国語とするものがわからなくなっているということ。

ウ　母国語を使う自分と、調査地の世界に全身で没入して身体感覚や認識が変化した自分のどちらが「変身」する前の自分かわからなくなってくるということ。

エ　母国語から現地語へ没入して現地語から母国語へ再帰しているのか、逆に現地語から母国語に没入して母国語から現地語に再帰しているのか見失うということ。

オ　「思わず現地語が出ちゃうケース」に加え、「思わず日本語が出ちゃうケース」が頻繁に加わるようになってしまったということ。

問十二　傍線(g)「一方的なプロセス」を経るものとしてこの文章中に述べられていることはどういうことか、最も適するものを**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア　異文化の言葉や概念が自文化の言葉や概念にスムーズに置き換えられることを前提として言語を学習すること。

イ　日本に戻って日本語で会話しているにもかかわらず、思わず「タッ」と軽く打つあいづちを使ってしまうこと。

ウ　現地の言葉を声音や身ぶりや表情といっしょに全身でまねて／学ぶうちに、自分の思考や独り言に現地語が出てくること。

エ　ある言語を話している人たちと暮らし、からだ全体を使ってその言葉を「まねる・学ぶ」うちに、身のまわりの世界や他者との関わり方に変化が生じること。

オ　現地で儀礼や呪術の実践にふれることで、呪術師や精霊たちの住む世界を、現実そのものとして受けとめるようになること。

国語

解答用紙一

〔Ⅰ〕

問一

①

④

⑥

問二

②

③

⑤

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

受験番号	

★

国語

解答用紙二

〔Ⅱ〕

問一
①
③
⑥

問二
②
④
⑤

問三

問四
～
から。

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

受験番号	

★
★